

## バフチンは謎めいた思想家だったか？

Was Mikhail Bakhtin an Enigmatic Thinker?

野 中 進\*

Susumu NONAKA

### キーワード化された思想家

今日、ミハイル・バフチン（1895 - 1975）は大なり小なりキーワード化された思想家である。彼の思想の鍵概念とされる対話原理やポリフォニー、カーニヴァル、クロノトポス（時空間）、多言語混交などは本来の文脈を離れ、バフチンが意図しなかったであろう問題領域にも応用されている。これらの概念は、今日の社会のさまざまな問題を論じるために有効なキーワードないしツールとして高い汎用性を示している。

もちろん、思想のキーワード化は有名な思想家にはめずらしくない現象である。ヘーゲルを読んだことがなくても「弁証法」という言葉を知る学生は多い。デリダを読まずとも「脱構築」は人気の高いキーワードとして広まった。ニーチェの「超人」やフロイトの「エディプス・コンプレックス」なども思想のキーワード化の代表例だろう。ようするに、一家をなしたほどの思想家であれば、その名とともに二つや三つのキーワードが記憶されているものだ。

それでも、あえて言うと、キーワード化されやすい思想家とそうでない思想家がいるのではないだろうか。たとえば、ヘーゲルやマルクスがキーワード化されやすい思想家だったのにくらべると、ヒュームやカントはそれほどでもな

いように思われる。これには思想の内容もさることながら、その思想がどのように受容されたか、どのような社会的影響力をもったかなども大きいだろう。バフチンについて言えば、あきらかにキーワード化されやすい思想家であった。また、そうなるだけの受容の文脈もあった。

キーワードの「賞味期限」という問題もある。つまり、流行りやすすぎたりだ。たとえば、バフチンの同時代人で同国人でもあるロマン・ヤコブソン（1896 - 1982）は構造主義ブームのしかけ人として意識的にキーワードを打ち出した観がある。「メタファーとメトニミー」、「コミュニケーション六機能モデル」、「詩的言語の自己言及性」などは、汎用性の高いキーワードとして 1980年代までは広く流布していた。だが 1990年代以降今日に至るまで、これらのキーワードは文学辞典・用語集類に記載はあっても、以前のように用いられていない。一言で言って、ヤコブソンの思想のキーワード化は一サイクルを終えた段階にある。それは、言語や詩についての彼の思想が価値を失ったということではなく、新しい解釈を待っているという意味である。

それに対して、バフチン思想のキーワードは今日もなお高い人気を誇っている。なるほど、1970 - 80年代のカーニヴァル論をめぐる熱狂的ブームは終わって久しい。それでも、対話やポリフォニーは今でも広く使われており、文学

\* のなか・すすむ

埼玉大学教養学部准教授，ロシア文学

研究や社会言語学以外の領域での応用も目立っている<sup>1</sup>。文学研究内でも、ポストコロニアル文学や移民文学など新しい研究テーマについて、対話や多言語混交の概念が再解釈され、他の思想家との対比を通じてキーワードの再定着が進んできた<sup>2</sup>。今日、バフチンは質量ともにキーワード化が進んでいる思想家の一人と言えるだろう。

断っておくと、キーワード化は思想の受容の一段階を示すもので、それ自体は批判すべきことではない。キーワード化なしには広い層に影響をもつこと、他分野への応用力が高まることは難しいだろう。キーワードとその意味内容が定式化されることによって、解釈の焦点が示され、思想家への関心がまとまったかたちを取ることもなる。たとえば、マルクスの「上部構造／下部構造」や「イデオロギー」などのキーワードは、彼の広大な思想地図に初心者が入っていくための手がかりになる。

だがその一方で、キーワード化のデメリットも考えなければならない。キーワードに基づく受容がしばしば平準化された、あるいはたんにまちがった理解であることは珍しくない。この点でも 20 世紀のマルクス主義受容—とりわけソ連における教条化のプロセス—は典型的な例である。公認されたキーワードで思想を読み解くことの害は、新しい解釈の試みがとどこおることだけではない。解釈の歴史が見落とされ、忘れられるという点も大きい。キーワードは解釈の歴史をとどめない。ある思想家がどのように見いだされ、何が問題とされ、解釈の方向が形作られてきたかの跡がキーワードからは拭い去られてしまう。

「バフチンとは謎めいた思想家だったか」とあえて過去形で問いを立てるのは、まさにバフチン解釈の歴史を読み直したいという考えからである。この半世紀のバフチン解釈をふり返る

とき、「謎めいた思想家」のイメージが独特な役割を果たしてきたことに気がつく。そのイメージはどのように作られ、どう機能したのか。今日、「謎めいた思想家バフチン」はすでに失効したイメージであるか。そうだとしたら、われわれはいつ、どうやってそこから抜け出していたのか。こうした点を検討することで、キーワード的な理解とは異なる、いわば歴史化されたバフチン解釈を示せるのでないかと思われる。解釈を歴史化することで、今あるキーワードの由来や問題点を明らかにできるだろう<sup>3</sup>。

### バフチン受容のあらまし（1960年代から80年代まで）

バフチンがキーワード化された思想家となるまでの受容史をまとめるとおおよそ以下のようになるだろう：(1) 1960年代の再発見と復権、(2) 1980年代を頂点とする世界的ブーム、(3) 1990年代以降のアカデミズム化とキーワード化である。順を追って説明しよう。

まず、(1) 1960年代の再発見と復権についてだが、そもそもバフチンはそれまでどこにいたのだろうか。モスクワの東南約 500 キロに位置する地方都市サランスクのエフドゥヴァ大学で教える退官間近の文学教授だった。1929年（当時 34 歳）、ドストエフスキーに関する小さな本を出し一定の注目を集めたものの、反ソ連的活動に関わったという罪状で逮捕、流刑の憂き目を見たあと、1930年代の大粛清、40年代の独ソ戦を生きのび、地方大学でポストを得、もうすぐ年金生活に入ろうとしていたミハイル・バフチンは比較的幸運と呼んでいいかもしれない、穏やかな生活を送る無名のソ連知識人だった。

その状況が劇的に変わったのが 1960年前後である。1956年のスターリン批判以後、政治や文化面で進んだ自由化の機運（「雪どけ」）のなか、バフチンのドストエフスキー論はふたたび

モスクワの文学界で語られるようになっていた。当時、大学院生だったヴァジム・コージノフ、セルゲイ・ポチャロフ、ゲオルギー・ガーチェフ（彼らはみな、その後高名な研究者、思想家になった）が、バフチンのまだ生きていることを知り、1961年にサランスクまで会いに行ったというエピソードは語り継がれることになった。コージノフらの当局との粘り強い、大胆な交渉によって1963年に『ドストエフスキーの詩学の諸問題』（1929年の初版に大幅増補したもので、ふつうバフチンのドストエフスキー論として知られている版はこちらである）、1965年には『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』（1941年に提出されたバフチンの学位請求論文に加筆したもの）が出版され、バフチンは世界的な注目を浴びる存在となった。ちなみに、日本ではドストエフスキー論が1968年に、ラブレー論が1974年に訳された。また、1976年にはヴォロシノフ、バフチンの二人の名前を冠して『マルクス主義と言語哲学』も訳された<sup>4</sup>。これは世界的に見ても早い反応であり、その後の日本のバフチン受容の骨組みを作った訳業でもあった<sup>5</sup>。

次に、(2) 1980年代を頂点とする世界的ブームだが、これはバフチン人気がアメリカの大学界で高まったことから起きた。当初、バフチンはソ連から直輸入されたというより、クリステヴァやドロフなどフランスの思想界を経由してアメリカに入っていた。だが、1984年にカテリーナ・クラークとマイケル・ホルクイストによる世界初のバフチンの評伝が出たことは、アメリカがバフチン研究の主導権を握ったことを表していた<sup>6</sup>。1980年代は「バフチン産業」という言葉がはやるくらい、多くのバフチン論がアメリカの学術雑誌を飾った。

世界的ブームの始まりに与ったもう一つの要素は、バフチンが友人たちの著作を代作してい

たとする説の登場だろう。この説を初めて公にしたのはソ連記号論の泰斗ヴァチェスラフ・イワノフである。彼は1973年の論文「記号、発話、対話についてのバフチンの思想が現代記号論にとってもつ意義」（基になった報告は1970年に行われた）で、ヴァレンチン・ヴォロシノフの三本の論文と二冊の単行本（『マルクス主義と言語哲学』『フロイト主義』）とパーヴェル・メドヴェージェフの単行本『文芸学の形式的方法』の主要部分はバフチンが書いたと断じた。その頃、ヴォロシノフとメドヴェージェフの著作はすでにソ連や欧米、日本の一部の研究者たちから注目されていたため、その真の筆者はバフチンであるというイワノフの証言は、バフチン思想の全貌についてほとんど神秘的なイメージを作り出した。

イワノフの証言は彼だけのものでなく、生前のバフチンを知るソ連の学者たちがほぼ共通して語るどころであり、つまり説の出所はバフチン本人であった。それもあって、この説はクラーク／ホルクイストの評伝でも踏襲され、世界的に喧伝されることとなった。前述のように、日本では1976年に『マルクス主義と言語哲学』が訳されたが、このとき筆者は「V.N.ヴォロシノフ、M.M.バフチン」と記されていた。だが1989年の改訳ではバフチンの名前だけが挙げられている。訳者の桑野隆は解説で、彼にとって「バフチン」と「バフチンとその仲間たち」は置き換え可能だと説明している。いずれにしても、こうした事情はバフチンをめぐる謎めいた雰囲気を増すのに役立った。

## バフチン受容のあらまし(1990年代から今日まで)

1980年代が終わると同時にバフチンへの熱狂的関心も落ち着いたように見える。そこで一定の役割を果たしたのは1990年に出たゲイ

リー・モーソンとキャリル・エマーソンによる『ミハイル・バフチン—散文学の創造』だったろう<sup>7</sup>。前述のクラークとホルクイストの評伝は伝記的な章と解釈的な章から成っていたが、こちらは純然に解釈的な研究である。バフチン思想の全体を見取るための主要概念として散文学（詩学に対置されるものとして）、未完結性、対話の三つを立て、それを手がかりにメタ言語学、心理学、ポリフォニー論、ジャンル論、長編小説論、時空間論、カーニヴァル論などの諸テーマを手際よくまとめている。この本が出たことによって、アメリカでのバフチンに関する学術論文のラッシュは収まった観さえあった。彼の思想を体系化しようとする動きの一つの到達点であった。

この本でもう一つ注目されたのは、イワノフによって示されクラーク／ホルクイストの評伝で世界的に知られるところとなった「ヴォロージノフやメドヴェージェフたちの主要著作の真の筆者はバフチンである」という説が厳しく論駁されたことである。たしかに、それまでも懐疑的な意見は出されていた。だが、モーソンとエマーソンはその疑いを押し進め、独特なやり方でイワノフ説を切り崩した。まず、バフチンは非マルクス主義者であり、それゆえマルクス主義的な書物を書くというのは理に合わない—これはイワノフもカテリーナ／クラークも気づいていた点である。彼らは、問題の著作に目立つマルクス主義的な言辭は出版しやすくするためのカモフラージュだった、あるいはヴォロージノフやメドヴェージェフが書き加えた部分だと説明した。言いかえれば、問題の著作は本質的にはマルクス主義的ではない、ということになる。モーソンとエマーソンはまずこの点を突き、問題の著作はその見かけどおり、マルクス主義的な書物であると主張した。次に、検証可能性の問題がある。イワノフやカテリーナ／クラーク

ク、さらにその他の弟子たちの説は基本的にすべて「バフチンが私にそう述べた」という回想に基づいている。バフチンがこの問題について文書で記したものはない。また、もう一方の当事者たるヴォロージノフとメドヴェージェフのこの問題についての証言も残っていない（前者は1936年に結核で病没、後者は1938年に逮捕、銃殺）。バフチンの証言の回想とは、それを聞いた本人以外の第三者による検証が不可能であり、したがってアカデミックな論証とは認められないとモーソン／エマーソンは断じた。彼らは「法学的」な議論さえ持ち出す—ヴォロージノフやメドヴェージェフの名前で出ている著作の真の筆者がバフチンであるという説を提出しているのはイワノフたち側であり、証明責任はそちら側にある。しかるに、彼らは検証不可能な資料に基づいた不十分な論証しかできていない。そうである以上、この仮説は却下されるべきだと。こうなると問題の本質とは関わらないようにも見えるが、アカデミズム的には影響があった。

これ以外にも、モーソン／エマーソンの論駁は重要な点を含んでいた。それは「偉大な思想家はかならず偉大なテキストを書き、劣った思想家は劣ったテキストしか書かない」というのは一種の思い込みであること、また「バフチンがヴォロージノフたちに影響を与えたというのなら、なぜその逆を考えてはいけないのか—つまり後者が前者に影響を及ぼした面もあったのでないか」といった指摘である。これはたしかに当時の（とくにロシアの）バフチン観の盲点を突いており、その後の「バフチン・サークル」の実証的研究の出発点にもなったと評価できるだろう。つまり、ヴォロージノフやメドヴェージェフをそれぞれ独立した思想家、著述家として読む流れである。「バフチン・サークル」研究は1990年代以降のバフチン研究の有力な部門として成果をあげている<sup>8</sup>。

1990年代以降（とくに2000年代以降）のバフチン研究で目立つ流れとして、ロシア宗教思想の文脈でバフチンを読み直す試みも挙げられる。彼が敬虔な正教徒であったことは知人たちが証言している。また1928年の逮捕も、ある宗教団体との関わりから始まったものだった。だが、1990年代初頭まではその伝記的な要素とバフチン思想の解釈を積極的に結びつけようとする動きは強くなかった。研究動向が変わるのは1990年代になってからだろう。その背景としてはソ連崩壊後、ロシアを中心に19世紀末から20世紀初頭にかけて隆盛したロシア宗教思想の研究が進んだことがある。バフチンも記号論やマルクス主義の文脈から切り離され、この系譜に置かれるようになった（ただし、偉大な宗教思想家パーヴェル・フロレンスキーが同時に記号論の先駆者でもあるなど、単純な「あれか、これか」の議論にはならない）。ロシア宗教思想の巨星ウラジーミル・ソロヴィヨフ（1853 - 1900）を頂点とするロシア宗教思想の系譜<sup>9</sup>、またロシア・フォルマリズムにも大きな影響を与えた文芸学者アレクサンドル・ポテブニャ（1835 - 1891）に端を発するとされるロシア独自の言語思想の系譜<sup>10</sup>にバフチンを位置づける試みも盛んである。日本でも貝澤哉がロシアの宗教思想におけるプラトニズムの伝統に注目し、バフチンのポリフォニー論もまた「ロシア宗教思想の構図を、そのまま文学の主人公やジャンル・言葉の次元へと変換したものにほかならない」、その点にこそバフチンのポリフォニー論がもたらした大きな影響力の源があると述べている<sup>11</sup>。

このように1990年代以降、バフチン研究はおもに思想史研究の方向でより実証的、アカデミックになるとともに、他方でキーワード化も進んだ。彼の主要概念は思想事典に登録され、広範囲な応用を見ている。実証的な思想的研

究の成果はまだ専門家集団の外側には届いていない。言いかえれば、「謎めいた思想家」のイメージは完全には失効していないということだ。それは今もなお、彼の主要概念の多彩さと幅広い応用を支え続けているのかもしれない。この点でもこのイメージの検証には意味のあることである。

### 謎めいた思想家

とはいえ、ある思想家が謎めいていたか否かの判定を客観的、一義的に行いうるかどうかは疑わしい。たんに受け手の側の知識不足や誤解による「謎めき」も考えられる。かといって、受け手に正しい知識を提供しさえすれば、ただちに謎めいた雰囲気は消失するかと言えば、そうともかぎらない。ある社会的グループ（世代や政治的党派など）がそうした「誤った」イメージを持っているばあい、「正しい」情報を提供しさえすればグループ全体が従来のイメージを放棄するかどうかは疑わしい。学問的な調査が進むことと、謎めいたイメージが払拭されることはかならずしも等しくはない。

逆に、受け手の知識不足とは別レベルで、現実の資料不足が問題の解決を妨げているケースもある。このばあい、謎めいたイメージは客観的な根拠をもつかに見える。だが、事実的に不明な点があることがただちに謎めいたイメージを作り出すわけではない。たとえば、思想家の生没年が不明であること（バフチンのばあい生年月日に複数の説があるが）はそれ自体で謎めいたイメージを作り出すだろうか。おそらくそれだけでは足りないだろう。あくまで他の要因との連関のなかで、資料不足による不明点が謎めいた機能を帯びることになる。

したがって、ある思想家たち—私たちはバフチンもその一人だと考えているわけだが—に付与される「謎めいたイメージ」は、受け手側の

誤解や客観的な資料不足とつながりつつも、それらとはレベルを異にした事象としてある。それは考察対象としての思想家とその受け手である私たちとのあいだに起こる歴史的・社会的なできごとの一側面として捉えられるだろう。受け手の側にも思想家の側にも一方的に収斂させることのできない事象として「謎めき」を考える必要がある。1960年代の「再発見」以降、バフチンに起こったことはまさにそうした事象であった。くり返せば、一方では受け手（バフチンの同時代人、ロシアの研究者、外国の研究者、一般読者などさまざまなグループに分かれる）の側の知識不足や誤解、他方では資料不足のために解決不能となってしまった問題などに起因しつつ、しかし全体としてはバフチンと私たちのあいだに起きた出会いのよう相として「謎めいた思想家」の肖像が描かれた。その出会いは時代的、文化的に条件づけられており、いついかなる状況でも起こりえたものではない。本論で明らかにしたいと思っているのはその具体的な条件である。

ある思想家が謎めいたイメージをもつか否かにかんしてもう一つ考えなければならないのは、そのイメージが思想そのものの解釈にどう影響するかである。伝記的、人間的に謎めいた要素があっても、それがつねに思想の解釈に影響するとはかぎらない。影響するとしても否定的に影響することも考えられる。伝記的、人間的な謎を思想解釈のミスティフィケーションにつなげてしまうようなケースである。

この点、バフチンについては次のように言えるだろう。当初から気づかれていたことだが、ロシア（ソ連）と欧米のバフチン解釈にはある種の違いが見られた（とくに1990年代まで）。ロシア側には、思想家バフチンのうちに何かしら謎めいた、ほとんど聖なる存在を見ようとする傾向があった。それはロシアの研究者が神秘

的な思想解釈を好んだということではなく、バフチンをいわば人格的に、その著作と人生を一体的に見ようとする傾向があったという意味である。彼の著作で語られる理論的問題は、伝記的資料に関する不明点やなかば聖人的なイメージとあいまって、独特な統一をなした。こうした統一を保持しようとしたのはおもに晩年のバフチンを知る「弟子」たちだが、じつはクラーク／ホルクイストの評伝もそうだ。彼らはアメリカの研究者だが、伝記的な部分ではロシアのバフチンの弟子たちの情報提供に頼っていた。1993年にロシアのサランスク（バフチンが後半生の大部分をすごした）で出た評伝はいっそう聖者伝的な傾向が強く、バフチンの生と思想は分かちがたい統一をなしている<sup>12</sup>。

とはいえ、ロシアのバフチン受容が一貫して謎めいた解釈を受容し、欧米がそうでなかったという図式化もすべきではない。本国でも時を経るにつれ、バフチンを直接知らない新しい研究者世代が現れ、バフチンの脱神秘的、あるいは奪冠的な読みが登場した<sup>13</sup>。また逆に、欧米でもバフチン思想にふたたび「謎めいた」要素を探ろうとする動きが認められる。宗教思想やロシア正教の伝統にバフチンを置き直そうとする前述の傾向のことである<sup>14</sup>。このアプローチはたしかに有力だが、今のところはまだ思想家の実像を明らかにしたというより、さらなる謎を書き加えた観が強い。1920年代半ば以降のバフチンのテキストに直接的な神の議論はめったに見いだされないからである。

私たちの作業仮説をあらためてまとめるとこうなる。この半世紀のバフチン受容で主調的役割を果たした傾向の一つに「謎めいた思想家」のイメージがある。まず、そのイメージの具体的内容と役割を確かめる必要がある。研究が進むにつれ、謎が謎でなくなった要素もあり、今もなお謎めいている要素もある。加えて、それ

らの要素がバフチン思想の解釈にどう影響したかを考えたい。その上で、彼の思想がこの半世紀において果たした役割、ひらたく言えば「結局、バフチンは何が面白かったのか」を考え直してみたい。それは、私たちが何のためにバフチン思想をキーワード化してきたかをふり返ることにもつながるだろう。

以下のような順で、バフチンに付与されてきた「謎めいた思想家」のイメージを腑分けしてみよう：(1) 伝記的な謎、(2) 執筆者問題の謎、(3) 人間性の謎、(4) 思想の統一性の謎。これは体系的というより作業仮説的な分類である。内容的に重複する項目もあり、ここには示されていない項目もあるかもしれない。また、謎としての重要度や解明度（どれくらい明らかになっているか）にも違いがあり、同日に論じることがそぐわないものもあろう（たとえば(3)など）。しかし、「バフチンは謎めいた思想家だったか」の問いに答えるための出発点としてはさしあたり十分だろう。

### 伝記的な謎（一知識人の略歴）

バフチンの生涯はある意味では平凡である。ロシア革命とソ連体制に翻弄されたソ連知識人の一つの典型的生涯と言えるだろう。彼の人生には逮捕と流刑はあったが、亡命や銃殺はなかった。独裁者の意志にその人生が直接左右されることもなかった。その意味で言えば、比較的穏やかな人生と言ってもよいかもしい。

略歴を追ってみよう<sup>15</sup>。1895年にロシア中部の都市オリョールに銀行家の次男として生まれる。父親の仕事の事情で1905年にはロシア西部のヴィリノ、1912年には南部のオデッサに移り住む。ここで一歳年上の長兄ニコライとともにノヴォロシースキー（オデッサ）大学に入る。1916年にバフチン家はペトログラード（以前はペテルブルグだったが、ドイツとの戦争が

始まり、よりスラヴ風の名前に改称した）に移り、兄とともにペトログラード大学の人文歴史学部編入したとされる。ロシア革命直後の1918年、バフチン家は食糧難の首都をはなれ、ネーヴェリというモスクワ南部の地方都市に移った。バフチンは妹（彼には三人の妹があった）らとともに家庭教師をして日々の糧を得ていたようである。この小都市にはバフチンと同じように内戦と飢餓を逃れてきた知的な若者たちの小集団ができあがった。当時は「カント・セミナー」、後に「バフチン・サークル」と呼ばれることになる集まりである。1921年、バフチンはこの地で生涯の伴侶エレナを得る。その後はヴィテプスク、レニングラード（1924年のレーニンの死を受け、ペトログラードは改称を重ねた）と移りつつ、学問と著述を行う。1928 - 29年には彼の人生を変える二つのできごとが起きた。一つは逮捕である。罪状は、反ソ連的活動を企てる宗教組織「復活」への関与であった。もう一つは彼の最初の単行本『ドストエフスキーの創作の諸問題』の出版である。取り調べの結果、白海に浮かぶ極寒のソロヴェツキー島の収容所への収監を宣告されるが、健康上の理由で減刑を嘆願。カザフスタンの都市クスタナイへの流刑となる。1930 - 36年、この地でバフチンは消費協同組合の簿記係として働いた。その仕事ぶりの優秀であったことが、流刑期間満了時に出された勤務評定書からうかがえる。その後、バフチンは教育職を求めて、サランスク、モスクワ、レニングラード、アルマアタ、そしてふたたびクスタナイと転々とした。逮捕歴のせいでモスクワその他の大都市での居住登録を受けることができなかった。1937年、モスクワから約100キロメートル離れたところにあるサヴェロヴォという町に住処を見つける。公的には1937年前後の大粛清（バフチンのように逮捕歴のある者は再び逮捕されないよう慎重

である必要があった)、私的には宿病の骨髄炎の悪化による右足切断など生活の苦しさはあったものの、この時期の著述活動は盛んであったらしい。1940 - 41 年にはモスクワの世界文学研究所で二度の講演を行った(「長編小説の言葉」, 「文学ジャンルとしての長編小説」)。同 1941 年、「リアリズムの歴史におけるフランソワ・ラブレール」と題した学位請求論文を世界文学研究所に提出している。ただし、サヴェロヴォ時代にバフチンがどのような仕事で生活の糧を得ていたかはよく分からない。

1941 年には独ソ戦が始まり、バフチンの生活にも影響があった。戦時中は中等学校でドイツ語やロシア文学、歴史などを教えた。戦後、ようやくサランスクのモルドヴァ教育大学にポストを得た。このとき、バフチンはすでに 50 歳だったが、後に彼の主著と見なされる仕事(ラブレール論や長編小説論)の主要部分はすべて書き終えていたことになる。戦争のために遅れていた学位論文審査が行われたのは 1946 年 11 月のことだった。この審査のようすも伝説的エピソードとなっているが、紛糾した審議の結果、博士より一段下の準博士(アメリカの PhD や日本の課程博士に相当)が与えられることになった。しかも、実際に学位が授与されたのは 1956 年のことだった。とはいえ、この時期のバフチン夫妻はそれまでとは比較にならない、安定した生活を送ることができた。大学でのバフチンはひじょうに熱心、とびぬけて博識、そして学生に人気のある教師だった。

1956 年のスターリン批判以後の自由化の波に後押しされての再発見とその後の名声についてはくり返さない。モスクワの弟子たちのあっせんで、1970 年、バフチン夫妻は住みなれたサランスクをはなれ、モスクワに移り住む。だが翌年には妻のエレーナが亡くなり、バフチン自身もショックのため危険な状況に陥るが、さい

わい持ち直した。名声と穏やかさに包まれた晩年を送り、1975 年 3 月 6 日、80 歳の生涯を終えた。

こうして見ると、彼の人生はソ連知識人としては劇的なできごとの少ない、穏やかな人生だったと言えよう。たとえば兄のニコライと較べてみよう。ニコライは 1915 年にペトログラード大学をやめ士官学校に入り、1917 年 2 月、二月革命のさなかに士官となる。白軍に加わり、その後フランスに亡命。遍歴の後にソルボンヌ大学とケンブリッジ大学で古典語・古典文学を学び、やがてケンブリッジ大学の教授となる<sup>16</sup>。弟の人生と較べてよりドラマティックとは言えよう。また、バフチンより一世代上のグスタフ・シュペート(1879 - 1937)は高名な哲学者だったが、革命ロシアにとどまり、芸術科学アカデミーの副総裁という要職もつとめたが、1935 年に逮捕、シベリアのトムスクに流され、1937 年に再逮捕、銃殺の憂き目にあった。高名だったシュペートに較べ、バフチンが無名であったことが幸いしたと言えらるだろう。

だがいくら穏やかといっても、バフチンの人生は疑いなく、革命とソ連体制に翻弄された。たとえば、彼は生涯外国に行ったことがなかったが、これは特徴的である。というのも、革命前のロシアでは大学で学問を修め、研究者の道を進もうとする人はドイツへの長期留学を行うのが常だった。上述のシュペートは 1913 年にゲッティンゲンで学び、フッサールの演習に参加している。彼は『現象と意味』(1914)を書き、現象学をロシアに広く紹介したことでも知られている<sup>17</sup>。バフチンの年長の友人マトヴェイ・カガンも新カント学派の泰斗ヘルマン・コーヘンに学び、新進気鋭の哲学者として帰国している。1917 年の時点でカガンは 28 歳、バフチンは 22 歳だった。おそらくはこの数年の差のために、後者はドイツ留学の機会を逸した。



このことは、バフチンの思想家としての形成に少なからぬ影響を及ぼしたと考えられる。

留学だけでなく、亡命やそれに類する出国も考えてみよう。革命直後から 1920 年代前半にかけてロシアの知識人にとって亡命は現実的な選択肢だった。だが一口に亡命と言っても、さまざまなパターンがあった。二度と祖国に戻らないケース(ナボコフなど)、一時的に亡命した後、ソ連に戻るケース(シクロフスキーなど)、自発的な亡命でなくソ連政府によって追放されるケース(哲学者のベルジャーエフなど)、もともとはソ連政府に派遣されたにもかかわらず結局ソ連に戻らなかったケース(ヤコブソンなど)など、さまざまである。またマヤコフスキーのように、亡命ではなくとも、その特権的なポジションゆえに外国旅行を許されたケースも多い。これに対して、バフチンはこうした機会がいつさなかった。そこには彼自身の選択もあったろうし、また彼が 1960 年に至るまで無名の存在であったことも大きい。亡命やその他の出国のための政治的動機もコネクションもなかったのである。

こうした意味で、彼の人生はソ連知識人の比較的平凡なケースとさえ言える。彼の人生を非凡にしたのはひとえにその著述である。もし世界から注目される著作を書かなかつたならば、辛酸は舐めたが全体としては穏やかな一生を送ることのできた地方の大学教授として生を終えただろう。世界的な思想家となったがゆえにその生涯も注目されるわけだが、外面的には劇的な要素は少ない。謎めいた要素も少ないように見える。

### 伝記的な謎(いくつかの空白)

ところが、再発見された当初からバフチンの生涯は「謎めいた」相を呈していた。事実関係が不明な点が多くなかったのである。そのこ

とは 1960 - 80 年代のバフチン受容において「謎めいた思想家」のイメージを作り出すのに役立った。不明な点のなかにはソ連社会の独特さに起因するものもあったが、伝記研究が進んでも未解明な点もある。

いくつか見てみよう。彼の父親の職業が銀行家だったのは確かだが、「ほうぼうの支店で支店長をつとめた」のか、「一介の銀行員にすぎなかった」のか説が分かれるとされている<sup>18</sup>。それ以上に議論的となったのは、バフチン家が貴族の出身か、平民の出かという問題である。コンキンはバフチンの出生証明書を示し、彼の出身階級が平民であることを論証している。だが、それまではコージノフやクラーク/ホルクイストが唱える貴族説、それも「14 世紀までたどれる名門」という説が信じられていた。たとえば、クラーク/ホルクイストは、バフチンの曾祖父が農奴を三千人売り、町のために士官学校を建てたが、その学校は 1918 年までオリョール市バフチン士官学校という名を冠していたと記している<sup>19</sup>。コンキンはこれをはっきり否定して、バフチンの父方の祖父はまずまず成功した商人だったことを示す公文書を挙げている。母方をたどっても結論は同じで、ロシア中部にバフチン家という貴族がいたのは事実だが、それはミハイル・バフチンの家系とは関係がないと結論づけている。

興味深いのは、バフチンの先祖が名門貴族だったという説の出所はバフチン自身だったと考えられることだ。1973 年に収録されたインタビューで、彼はかなり誇らしげに自分の家系について語っている。高祖父(曾祖父でなく)が農奴三千人を売って士官学校を建てたという話も、ここでしている<sup>20</sup>。また、祖父はオリョールに銀行を作ったが、部下に騙され、倒産してしまったとか、父親はその銀行の重役だったとも話している。

注目すべきことに、1928年に逮捕されたときの調書では、バフチンは自分が平民の出身であると供述している<sup>21</sup>。もちろん、スターリン時代に自分が貴族出身であると述べることは危険な行為だったから、この食い違いは説明できないものではない。それにしても、雄弁に自分の家系について語る（それでいて「私はあまり興味をもたなかったが、兄のニコライは我が家の家系をよく調べていました」とも断っている<sup>22</sup>）インタビューのようすは、コンキンの示す資料さえなければ、読者が疑いを差し挟めないほど確信に満ちている。

さらに不思議な話として、バフチンの学歴がある。彼はオリョール、ヴィリニユス、オデッサのギムナジウムで学び、オデッサ大学とペトログラード大学に入学したと述べている。だが、今までのところ彼がペトログラード大学に在籍した記録は発見されていない（兄のニコライの在籍記録はあるのに）。卒業生名簿にも名前がない。コンキンは、バフチンが聴講生の身分で学んでいたのではないかと推測している<sup>23</sup>。インタビューでも、バフチンは授業を受けた教授陣についてはくわしく述べているが、自分が何年にペトログラード大学に入ったか、何年に学業を終えたかについてはあいまいで「記憶がはっきりしない」と釈明している。ただし、この戦乱の時期、大学を正式に卒業することなく社会に出て行くことは例外的なことではなかったようだ。前述のように兄のニコライも、またバフチン兄弟の友人プンピャンスキーもペトログラード大学を卒業していない。

1928年にバフチンが逮捕されるきっかけとなった宗教団体「復活」についても、彼がどの程度関与していたかはっきりしていない。そもそも「復活」は反ソ連的な地下組織でなく、宗教人の集団にすぎなかった（ただし、アレクサンドル・メイエルやゲオルギー・フェドート

フといった高名な宗教人が中心メンバーであり、活動は活発だった）。バフチンはそこで哲学や文学についての講演を行ったと言われている。当局による「反ソ連組織」や「陰謀」のでっちあげは当時、組織的に行われていたことであり、バフチンが積極的な活動をしていないのに逮捕されたこと自体は不思議ではない。ただ、当時の調書によれば兄のニコライがフランスに亡命している事実は当局に把握されていた<sup>24</sup>。

1930 - 36年のクスタナイでの流刑生活を終えてから戦争が始まるまでの「流浪」の実態も完全には明らかになっていない。バフチンはモスクワやレニングラードの友人宅を渡り歩いたとインタビューで述べている。当時モスクワに住んでいた親友のカガンがバフチン夫妻のようすを書きとめた貴重な手紙が残っている：「[1936年]八月五日の晩、まったく思いがけずバフチン夫妻がわが家を訪れた。彼らは休暇を利用して、まずレニングラード、それからモスクワに来たのだ。[...] 見た目にはバフチンは元気そうだ。エレーナのほうがずっと具合が悪そうに見える。バフチンは、僕が思っていたよりずっといい、一あらゆる面で」<sup>25</sup>。だが、こうした資料によって鮮やかに、けれども断片的に照らし出される以外の日々については闇に沈んだままだ。

こうした時代、バフチンがどうやって自分の仕事を続けていたかも疑問なしとしない。彼はすでにクスタナイにいたころからラブレール論に取りかかっていたとインタビューで述べている。資料はどうしたのかという質問に対して、友人の生物学者カナーエフがレニングラードから送ってくれていたと述べ、郵送用に使ったという箱の説明もしている。箱の蓋の片方にバフチンの住所が、もう片方にはカナーエフの住所が書かれており、それをひっくり返しては何度も使ったというのである<sup>26</sup>。伝説的なこのエピソード

ドについてバフチン研究者のブライアン・プールは、これに較べれば『テンペスト』の主人公プロスペローが朽ち果てた小舟に蔵書を積んで孤島に流れつくエピソードのほうがまだ真実味があると、露骨に不信を示す<sup>27</sup>。

さらに、モスクワ近郊のサヴェロヴォに住んでいたとされる1939-1941年のバフチン夫妻はきわめて貧しく、家族（母親と妹たち）からの援助を受けていたのではないかと『ドゥヴァーキンとの対話』の注釈者は推測している。つまり、彼がもっとも生産的だったと目されるサヴェロヴォ時代、どのように生活を立てていたかは確かめられていないのである。

1945年から60年までの穏やかなサランスク時代はどうかと言えば、たしかに彼が熱心かつ有能な大学教師であることはよく知られている。だがこの時期、彼がどういう著述に取り組み、どういう思想問題に考えをこらしていたのか、明らかでない点がある。前述のとおり、バフチンは1941年にはラブレーについての学位請求論文を提出した。ほぼ同時期にゲーテ論も書き上げていたと言われる（印刷所に出していた原稿はドイツ軍の爆撃によって焼失し、バフチンの手元に残っていたはずの手書き原稿は、彼が巻煙草を巻くためにその大半を使ってしまったという「伝説」はあまりに有名である）。つまり、彼の主著として知られる著作の大半は45年までに書かれていたことになる。その後、モスクワの若い研究者たちに見いだされるまでの15年間にどのような仕事に取り組んでいたのか、よく分かっていなかった。現在、ロシアで刊行中の著作集の第5巻には40年代から60年代までの草稿が収められているが、断片的な草稿がほとんどで、まとまった仕事は少ない。例外的に、1953-54年に書かれたとされる「言葉のジャンルの問題」が比較的まとまっており、これが50年代の主著ということになる。それ

でも1920-30年代の超人的な著述活動、また1960-70年代の熱心な改稿作業や断章類の執筆と較べると、空白期間という印象を受ける。この時代のバフチンの暮らしぶり、とくに思索と著述面を仔細に伝える存在（若いころの友人や晩年の弟子など）がいないことも、この時期の空白さに影響している。サランスク時代のバフチンは教育により多くの情熱を注いでいたのだろうか。

このように、簡単に見ても、バフチンの生涯にはいくつかの不明点があり、それが謎めいたイメージの形成に役立ってきた。本人が述べていることでも文書資料によって検証されないことがしばしばある。一般的傾向として、ロシアでは証言や回想がもつ文化的価値が高い。バフチンのばあい、晩年の弟子たちの回想が思想家本人の言葉を伝えるものとして特権的な意味をもってきた。彼らが若かりし日に見たバフチンの姿と言葉をそのままに伝えることが、ソ連末期には大きな社会的意味をもった。そこに謎めいた要素が混じっていることは証言の価値を下げるよりも、むしろ高めたかもしれない。これらの証言に多くを依るクラーク／ホルクイストやコンキンの評伝に一種聖者伝的な雰囲気があるのはこのためである。今日に至るも、これらの評伝とは質を異にする学術的伝記が書かれていないという事実は、バフチンの生涯の個々の不明点の書き換えは進んでも、全体的な枠組変換にはまだ達していないことを示しているだろう。

こうした文化的・社会的背景をもつあいまいさが、もっとも目立ったかたちで現れたのが、いわゆる執筆者問題である。これは、上述のような伝記的事実に関するあいまいさよりいっそう直接的にバフチン思想の解釈に影響した。

## 執筆者問題の謎

執筆者問題とは、バフチンが 1920 年代半ば（レニングラード時代）に何人かの友人の代作をしたとされる問題のことである。より正確には、晩年のバフチンが周囲にそう語っていた問題のことと言うべきかもしれない。この問題がどのように生じたか、くりかえしになるが確かめておこう。

この説を初めて公にしたのはソ連記号論の泰斗ヴァチエスラフ・イワノフだった。彼はその論文「記号、発話、対話についてのバフチンの思想が現代記号論にとってのもつ意義」の注釈で、ヴォローシノフの論文「生活の言葉と詩の言葉」（1926）、『フロイト主義』（1927）、「西欧における言語学思想の最新潮流」（1928）、『マルクス主義と言語哲学』（1929）、メドヴェージェフの『文芸学の形式的方法』（1928）について、その主要テキストはバフチンの手になるものであり、「彼の弟子である V.N.ヴォローシノフと P.N.メドヴェージェフは […] わずかな加筆といくつかの箇所の変更を行っただけである」と断じた。特徴的なことだが、彼は自説の根拠としてこう述べるのみであった—「これらすべての著作が一人の著者の手になることは、目撃者の証言によって確認されているが、[イワノフが論文中で行った一野中] 引用箇所から確信されるように、テキストそのものによっても明らかである」<sup>28</sup>。

この説は生前のバフチンを知る人々のあいだで広く共有されていた。コンキンもその評伝の注釈で次のように述べている：この問題についてバフチンに二度質問をしたことがあるが、「一度は、ヴォローシノフとメドヴェージェフが当時、彼の助け（もちろん、学問的な）を必要としていたと語った。とくにそれを必要としていたのは、東西比較文学・言語史研究所の大学院に籍を置いていたヴォローシノフだった。彼ら

のサークルではだれが本当の筆者かという問題は本質的なものとは見なされなかった。これらの昔日のことについて今、書面で何らかの発言を行うことに関しては、ヴォローシノフとメドヴェージェフがすでに亡くなっているという一事からしてもまったく不可能であり、受け入れがたい作業であると彼は述べた」<sup>29</sup>。

これらの証言の資料的価値をモーソンとエマーソンが鋭く突いたことはすでに述べたが、彼らはそれらの証言がけっして一通りの解釈しか許さないものではないとも指摘している。たとえば、『文芸学の形式的方法』に関してバフチンが生前「パーヴェル・ニコラーエヴィチ [・メドヴェージェフ] も手を入れたが、それでいつもよくなったわけではない」とか「私は彼を手伝った」などの発言をしたという証言がある。さらに、メドヴェージェフが、自分の本を「ミハイル・ミハイロヴィチ [・バフチン] との会話に基づいて」書いたと述べたという証言もある。ここから『文芸学の形式的方法』の真の筆者はバフチンであるという結論が導かれたわけだが、しかし次のような解釈もありうるのではないか：メドヴェージェフがバフチンとの会話からヒントを得て、マルクス主義的な著作を書き上げ、それを評してバフチンが「それでいつもよくなったわけではない」と言い、「私は彼を手伝った」と説明したのだと<sup>30</sup>。たしかに、上に引いたコンキンの証言にしても、両義的に取れる要素を含んでいる。「助け」というのはどのようなレベルでの助けだったのか。

こうして、問題の著作の第一義的な意味での筆者がバフチンその人であるという説は今日では根拠が弱いと見られている。しかしその一方で、バフチンの思想が論じられるときに問題の著作がいまだに参照されているのも事実である。現在、日本では新しいバフチン著作集が刊行中だが、そこにはヴォローシノフやメドヴェージェ

エフの著作が彼らの名前で収められている（別冊の扱いでもなく）。もし、問題の著作が本当にバフチンのものではないと信じられているなら、バフチン著作集に収める必要はないはずだ。おそらく、ロシアで刊行中のバフチン著作集も何らかのかたちで問題の著作を収録するだろう。ここで働いている編集者の論理（ないし心理）は、これらの著作がバフチンの書いたものであることを論証はできないが、それでもその可能性を捨てきれないというものだろう。

結局のところ、イワノフが自説の根拠として挙げたのが「目撃者の証言」（目撃者とは具体的にだれのことか、そして何を目撃したのかさえ、彼は述べていない）と「テキストそのもの」であったことは特徴的であった。その後も肯定派が示しえた論拠は、原則的にこれ以外にないからである。ソ連時代、「生き延びた者」（革命、スターリン時代、大戦、ラーゲリ生活などを）の証言は大きな文化的意味をもっていた。バフチンの執筆者問題のばあい、さらに言えるのは、イワノフやコージノフ、ボチャロフたちは、1970年代以降のソ連とロシアの人文学を代表する学者ないし思想家であり、その権威も少なからぬ意味をもったことだ（彼らがみな、ソ連政権から距離をとっていたこともその権威を高めていた）。ひらたく言えば、「あの人たちがそう言うのだから、そうだったのだ」とする社会心理がロシアでは働いていたと考えられる。その説のもともとの出所がバフチンだとすればなおさらのことである。（ちなみに、本文の筆者が1996年にイワノフに会ったとき、この点を尋ねたところ、「私は彼〔バフチン〕から聞いたのだ」と憤然とした調子で言い、それ以上の論拠を求めること自体おかしいという口ぶりだった。）こうしたソ連・ロシアの社会的・文化的風土が欧米のアカデミズムで受け入れられなかったという説明も可能だろう。

## 執筆者問題はバフチン解釈にどう影響したか

執筆者問題は事実的な側面ばかりでなく、解釈的な側面ももっている。問題の著作がバフチンの手になるものか、彼の友人たちに帰するかで、バフチン思想の解釈の方向性が変わってくるからだ。言いかえれば、バフチン思想の統一性をどこに見るかという問題である。

執筆者問題でもっとも議論になったのは、マルクス主義の要素だ。問題の著作では明らかにマルクス主義的な立場が示されている。これをどう解するかが問題になってきた。というのも、晩年の弟子たちを中心に、バフチンがいかなる意味でもマルクス主義者でなかったとするのがほぼ定説だからである。非マルクス主義者であるバフチンがなぜマルクス主義的な著作を書いたかという問いは、執筆者問題に関わるすべての研究者が立ち向かわなければならなかった。

イワノフやクラーク／ホルクイストが示した説は、問題の著作のマルクス主義的な部分はカモフラージュである、あるいはヴォローシノフやメドヴェージェフが行った挿入であろうというものである。そうだとすれば、問題の著作の思想的意義は非マルクス主義的要素に求めなければならないことになる。実際、イワノフはバフチン思想の現代的意義を文化記号論の先駆者という点に求めている。1970-80年代にはこの解釈は有力だった。イワノフが掲げた記号、発話、対話、そしてカーニヴァルなどの鍵概念は、バフチン思想をもっとも「広く」捉えるための構えだった。それは事実上、脱マルクス主義的な読みである。バフチンを脱マルクス主義化しつつ、文化記号論の先駆者として読もうとするとき、ヴォローシノフやメドヴェージェフの著作もバフチン思想の不可欠な一要素に含まれるというのがイワノフの立場だった。

だが、問題の著作のマルクス主義的な要素とは実際にはどのようなものだったのだろうか。

『マルクス主義と言語哲学』からもっとも「マルクス主義的」と見なしうる部分を引いてみよう：

たいていのばあい、イデオロギー的現象は意識の現象として、つまり心理学的にとらえられてしまっている。ために、そもそも主観的な意識や心理の特性とは絶対に同一視しようのないイデオロギー的現象の特性にたいして、的確なアプローチがなされないままになっている。まさにそのために、イデオロギー的形成物という特殊な物質的現実である言語の役割も、十分に評価されずにあった。

それに加えて、マルクスやエンゲルスといった創始者たちがわずかにしかふれなかつたり全然ふれていない分野のすべてに、機械論的カテゴリーがしっかりと根づいてしまっている。基本的にはこれらすべての分野は、まだ弁証法以前の機械論的唯物論の段階にある。そのことは、イデオロギーにかんする学問の全分野をいまなお機械論的因果律なるカテゴリーが支配していることにもあらわれている。同時にまた、経験にたいする実証主義的な見方や、弁証法的にでなく不動の安定したものと解した〈事実〉の崇拜もまだ消えてはいない。マルクス主義的な哲学はこういった分野へはまだほとんど浸透していない。<sup>31</sup>

ここで述べられている立場がたんにカモフラージュと言えるかどうか、疑問である。20世紀のマルクス主義思想史の見地からすれば、グラムシのヘゲモニー論との同時代性<sup>32</sup>やアルチュセールのイデオロギー論、スチュアート・ホルのカルチュラル・スタディーズに対する先行性は明らかだろう。下部構造（土台）と上部構造の決定論的図式を批判し、上部構造（イデオロギー）の構成要素としての記号、とりわけ言

語への新しいアプローチを提唱することは、1920年代半ばのソ連思想界においては大胆な、そしてしだいに危険となりつつあった立場表明だったと考えられる。マルクス主義の枠組での新しいイデオロギー学構築がレニングラード時代のバフチン・サークルの思想的課題であった可能性は高い。1920年代初頭、ネーヴェリとヴィテプスクで「カント・セミナー」を開いていたときと違い、1924 - 29年のレニングラード時代、バフチンと友人たちはソ連社会の思想的現実に適応するという新しい試練に直面していただろう。クラーク／ホルクイストは、バフチン・サークルのメンバーの「ほとんどは1920年代中頃に知的危機を経験した」<sup>33</sup>と指摘している。バフチンがネーヴェリ、ヴィテプスク時代に書いていた草稿「行為の哲学」、「美的活動における作者と主人公」は新カント学派や現象学への参照が目立つが、1920年代半ば以降には影をひそめる。晩年のインタビューでバフチンは自分が新カント学派の徒だったことを強調しているが、そこには回想の作為が認められなくもない<sup>34</sup>。晩年の発言に基づいて1920年代に彼がマルクス主義から受けたであろう思想的インパクトを過小評価するのは適切でないという指摘もある<sup>35</sup>。

このように、執筆者問題はたんに「問題の著作の真の筆者はだれか」という問いだけでなく、1920年代のバフチンの思想形成の議論にも関わってくる。この時期のバフチンの消息を伝える資料がきわめて少ないので、なおのこと、問題の著作とバフチン・サークル全体の検討が重視されている。1920年代初頭のいわゆる「初期バフチン」と1920年代末のバフチン（1929年のドストエフスキー論に代表される）のあいだに感じられる何らかのミッシング・リンクを埋める役割を期待されているのが、近年のバフチン・サークルの思想史的研究である。

執筆者問題は、その資料面での解決不能さもあわせて、もはや「謎めいた思想家バフチン」のイメージを強くは作り出していない。むしろ、バフチンとバフチン・サークルの思想史的位置づけの手がかりを与えている。そのとき、はたしてバフチンが（かつてイワノフらが強調したように）記号論なり社会言語学の先駆者的な存在だったのか、それとも一つの思想史的時代の終わり、いわばその完成者的な存在だったのではないかという疑問がわく。同時代のロシア・フォルマリスト、トゥイニャーノフの卓抜な図式を借りれば「復古者か、革新者か」の問いである。1960年代にバフチンが世界の前に姿を現したとき、たしかに彼は革新者だった。ポリフォニー論にしても、カーニヴァル論にしても、時代を先取りした論点だった。だが、彼の主要概念をそれが生まれた時代に戻してみると、むしろ復古的役割を演じていたのではないかと推測できることがある。バフチン・サークルについての研究はしばしばそれに近い論点を提出している<sup>36</sup>。それ以外にも、バフチンの教養や文学的好み、政治的立場や信仰の問題を再構成していても、この印象は強まる。

### 人間性の謎

バフチンは人間的にはどのような人物だったか。今日、彼の書簡（ただし、数は多くない）、晩年のインタビューが読める。また、ロシア人の好きなジャンルである「回想」が、バフチンについても数多く書かれた。だが私の個人的な印象を述べれば、彼の人となりにはどことなく謎めいたものがあるように感じられる。そして、そのことは彼の思想の解釈に一定の影響を及ぼしてきたように思われる。

ここでも、バフチンのイメージ形成のイニシアチヴを握ったのは晩年の弟子たちである。有名な逸話として、1960年にはじめてコージノフ

たちがサランスクにバフチンを訪れたとき、同行したガーチェフが感激して、バフチンの前に跪き、「ミハイル・ミハイロヴィチ！ どうすればあなたのように生きられるのでしょうか！」と叫んだとコージノフが伝えている<sup>37</sup>。またイワノフは、バフチンとはどのような存在だったかという問いに対してこう答えている—「バフチンは完全なる精神的自立の具現だった。彼はたんにソ連政権とそのイデオロギーに抗していたのではなく、完全にその外側、彼岸、「大きな時間」のなかにいた」<sup>38</sup>。後期ソ連を生き抜いた知識人にとって、バフチンが一種の文化的アイコンであったことがうかがえる。彼らはバフチンの著作と人間のなかにソ連の公式文化とはまったく無縁な、偉大な精神的・知的存在を見ていた。だから、イワノフは近年、バフチンのカーニヴァル論とスターリン主義の類縁性について語る「幻想的な仮定」について、これ以上の誤りを知らないと言っている。

しかし、主観的な印象であることを恐れずに言えば、たとえば『ドゥヴァーキンとの対話』には聖人的でないバフチン像が現れている。このインタビューは彼が亡くなる二年前に行われたもので、妻に先立たれた老境の思想家のわびしさが伝わってくる。しきりに記憶力の減退を嘆いており、あるときはシェリングの名前が出てこず、どうして思い出せないのだろうと取り乱している<sup>39</sup>。このインタビューを読んだ率直な印象は、彼の人となりがつかめないというものだ。ロシアの人文学者ボリス・エゴロフ（1926-）も、新聞のインタビューやテープレコーダーが伝えるバフチンの姿は「古めかしく、孤独で、取り残された」印象だったと回想している<sup>40</sup>。バフチンの著作での雄弁ぶりとインタビューなどから伝わる人となりとうまく合致しないという意味だろう。それにはいくつかの理由が考えられる。

ところで、このインタビューを行ったヴィクトル・ドゥヴァーキン（1909-1982）はジャーナリストではなく、モスクワ大学の教授で、ロシア詩の研究者だった。1966年、反ソ連的な文学作品を国外で発表したとして小説家のシニャフスキーとダニエルが裁判にかけられた有名な事件がある。その裁判でドゥヴァーキンはかつての教え子シニャフスキーの才能を称える証言をした。これはきわめて大胆な行動であり、彼は文学部を追放された。モスクワ大学の学長の取り計らいで、新しい職場と職務を与えられた。それが20世紀初頭のロシア文化に関する学術的インタビューを採録するというプロジェクトである。インタビュー対象の一人にバフチンが選ばれた。ドゥヴァーキンはソ連に一時帰国していたロマン・ヤコブソンなど、何人かの人物にインタビューを行ったが、もっとも広く知られているのがバフチンのインタビューである。それは五回にわたって行われ、本としては注釈を含めて400ページに達する大部のものである。内容的な特徴としては、バフチンの文学的好みについての質問がもっぱら詩に関するものだった点の一つ。もう一つはバフチンの思想形成に関してドイツ哲学（とくに新カント学派）が決定的な役割を果たしたという証言が引き出された点である。このインタビューに解説文を寄せたコージノフは、詩も新カント学派もバフチン思想の本質的な要素でなく、その意味でこのインタビューは物足りない、さらにはミスリーディングだと不満を述べている。

だが逆にいえば、その二点を引き出しえた点にこのインタビューの資料的価値も求められるだろう。バフチンの詩の好みがはっきりシンボリズム（ロシアでは1890年代末から1900年代に支配的だった潮流）にあって、ロシア・アヴァンギャルドの代表である未来派（マヤコフスキーやフレーブニコフなど）には冷淡であった

ことがうかがえる。また彼の西欧哲学への造詣がいかに深かったか、ソ連時代に教育を受けたドゥヴァーキンにはときに理解不能であるほど（彼はキルケゴールの名前を知らないと述べている）だった。

このインタビューでのバフチンの語り口は「静かな（ロシア語でチーヒー）」ものだ。その一方で、彼は自分が実際に見た世紀転換期の詩人たち（メレシコフスキーやギッピウスなど亡命した詩人たちも含め）のようすもくわしく語っているが、そこにはゴシップめいた人物評も見られ、真面目一徹という印象はない。むしろユーモアとアイロニーを愛する人となりだったように思われる。彼の友人のメドヴェージェフがロシア象徴派の大詩人アレクサンドル・ブロークの妻リュボーフィの愛人だったことなども面白そうに語っている。他人については雄弁だが、自分について語ることは好まない。そのため、性格や信念などが伝わってこない印象を受ける、そういう意味で物足りないインタビューではある。だが、20世紀初頭のロシア文化の記録を残すことがインタビューの目的だったとすれば、やむをえない面もある。

人となりをはっきりしないという印象は、彼の手紙を読んでも感じられる。彼の手紙は数が少なく、よく知られているのは1920年代半ばに親友のマトヴェイ・カガンに書き送った何通かの手紙である。まだ二十代のバフチンは生活のようすや著作の計画について書き送っている。年長の友人に対して彼は率直で、明るい。当時、カガンはオリョール大学や芸術科学アカデミーなどにポストを得たが、職場での人間関係のトラブルに悩んでいた。これに対してバフチンは、こうした時代には最良を求めてもしかたないから、今の職場に我慢してとどまるよう、諄々と説いている。若々しくも老成している印象を与える<sup>41</sup>。



バフチンについて書かれた数多くの回想について言えば、晩年の弟子たちの回想とは別種の肖像、別種の面白さを与えるものとして、1940-50年代の学校の教え子たちの回想がある。そこには思想家や哲学者でなく、文学教師としてのバフチンが描き出されている。独ソ戦末期の1944年に高校で彼の授業を受けた人物の回想から引いてみよう―「あの時期、だれもが苦しく、バフチンも例外でなかった。彼は飢え、寒い学校で凍えていた―われわれ全員と同じように。だがいったん授業が始まると、彼はすべてを忘れた。夢中になって語り、両手を振りまわして、たえず学校の教科書をののしっていた。『なんだってこんなものを読むのですか』と彼は私たちに言うのだった。『作品を読まなければ、作品そのものを。すっきり、そして全部』。そして私たちは、とくに鐘が鳴ったのも忘れて、口をあけて座っていた。彼の話はいくらでも聞いていられた。バフチンの文学に対する態度はかなり率直だった。覚えているが、カリキュラムでマヤコフスキーを取り上げなければならなかった。ミハイル・ミハイロヴィチは教室に入ってくると、断固たる調子で言い放った―『私はマヤコフスキーは嫌いだから、彼の詩は読みません』と」<sup>42</sup>。その他、授業以外に文学クラブを生徒のために作ったことや、他の教師は生徒にたいして「トゥイ（君、お前）」で話すのがふつうだったが、バフチンだけが「ヴィ（あなた）」で接していたことなど、きわめて良心的で熱心な教師像が伝えられている。

くりかえしになるが、彼は自分について著作でも手紙でも多くを語っていない。おそらくはそのせいで、多くの証言が一つのクリアな像を結ばないのだろう（少なくとも私にとっては）。不思議なことだが、彼の思想がやはり多面的で明確な統一イメージを作り出さないこととパラルレルなものを感じる。

## 正教徒としてのバフチン

バフチンの人となり、人間性が話題になると、彼が敬虔な正教徒であったことがしばしば指摘される。ドゥヴァーキンのインタビューでも、信者であるかという質問に対して、はっきり肯定している。また注目すべきこととして、ユダヤ教はいずれキリストを受け入れ、キリスト教と一体になるだろうという独特な考えも口にしてしている<sup>43</sup>。ソ連時代、知識人にとって正教がどのような意味をもったかは、時期や潮流によってさまざまに一概には言えない。バフチンは革命以前の正教をめぐる状況もよく覚えており（七歳のとき、全ロシアで崇敬されていた聖クロンシュタットのイオアン（1829-1908）を見たことがあるとも述べている）、なおのこと複雑である。

よく知られているのは、1919年にネーヴェリでバフチンが「神と社会主義」と題された公開討論会に出席し、友人のブンピャンスキーとともに正教を擁護する講演を行った記録である。新聞記事では毒を含んだ調子で報じられている―「彼〔バフチン〕は民衆の無知の轡である宗教を擁護したが、話をしながらどこか天空高く舞い上がってしまった。彼の話には生活と歴史からの生きた例がなかった。発言のある箇所では社会主義を認め、評価はしたが、しかしそのまさに社会主義が死者のことをすこしも気にかけない（ロシア正教式の供養をしないからだろうか？）、嘆き心配した。〔…〕全体に彼の発言を聞いていると、柩のなかに横たわり朽ち果てた多くの死者たちが、今にもよみがえって起き上がり、すべての共産主義者と彼らのみちびく社会主義を地上から一掃するような気にさせられた」<sup>44</sup>。

ドゥヴァーキンとのインタビューでは、1928年の逮捕のきっかけとなった宗教団体「復活」の中心メンバー、アレクサンドル・メイエル

(1874-1939)についてもくわしく語っている。ただし、メイエル立場は正教と革命(社会主義)のつながりを見いだそうとする社会改革的なものであり、バフチンは賛同していなかった一だから、自分が「復活」との関わりで逮捕されたのは当局のこじつけだったと説明している<sup>45</sup>。これらの記録や証言から総合的に判断すると、バフチンの宗教性は社会改革的な傾向の弱い、しかし思想的に独特な要素を含んだものでなかったかと思われる。彼が自分の信仰に政治的な意味を付していたとは考えにくい。言いかえれば、自分の信仰をソ連体制への不順応のしるしとは考えていなかったのではないか(事実、彼がそうした政治的態度を公にしたことは一度もない)。バフチンにとっての信仰とは、政治的・社会的次元とはまったく異質の霊的次元に置かれていたように思われる。

「正教徒としてのバフチン」像を彼の著作との対比で考えるとき、しばしば問題になったのがラブレー論である。この著作では無神論的立場が取られているわけではないが、反教會的(ただし、問題となるのはカトリック教会だが)ではある。カーニヴァル文学における聖なる価値の格下げは、バフチン思想の宗教性の問題とどうつながるのだろうか。1920年代初頭の「初期バフチン」や1929年のドストエフスキー論に宗教思想的な構図を読み取ろうとする試みが進むなか、ラブレー論の位置づけにとまどう声はしだいに強くなってきた。あえて言えば、ラブレー論はこの二十年を通して、しだいにバフチン思想のマージナルな部分に移されてきた。1980年代まで彼の思想のドミナントは「対話とカーニヴァル」に求められてきた。だが、対話やポリフォニーの倫理的、実存的な傾向、あるいは多言語混交の文化論的パースペクティブは今もなお有力視されているのに対して、カーニヴァル論のもつユートピア論、社会解放論的な

契機は以前ほど重く見られていない。

ロシア正教では体系的な神学が発達せず、典礼や修行がそれに代わる役割を担った。正教の神学思想はむしろ世俗から現れ、19世紀前半のスラヴ派(ホミャコフ、キレエフスキーなど)が唱えたソボルノスチ(正教的共同性)論の伝統が生まれた。ソボルノスチ論はドストエフスキーやソロヴィヨフ、さらにその後継者たち(ベルジャーエフ、セルゲイ・ブルカコフなど)によって20世紀前半のロシア宗教思想ルネサンスの主要テーマとなった。この流れの研究が進むにつれ、バフチンをその終わりに、とりわけ言語論的思想への変換として位置づけようとする傾向が強まっている。

バフチンがどのような意味で正教徒だったかを考えることは、彼の思想のドミナントをどこに見るかの問題とつながっている。かつては彼が正教徒であることは「謎めいた思想家」のイメージの一要素であったが、それは1980年代以前は正教思想の研究が進んでいなかったことにもよる。今日、宗教思想の伝統へのバフチンの帰属問題はまだ答えが出ていない。だが、バフチンの「謎」を形成する要素ではなくなりつつある。彼の思想史的位置づけはしだいに明らかになり始めている。

### 思想の統一性の謎(ポリフォニー論を例に)

1960年代の再発見、1980年代の世界的ブームといくどかの波を経つつ、バフチン受容はその思想の統一性、言いかえればドミナントのあり方について議論を交わしてきた。有力だったのは「対話とカーニヴァル」(イワノフ、桑野隆)、対話主義的な哲学的人間学(トドロフ)、「散文学、未完結性、対話」(モーソン/エマーソン)などだろう。これらの定式化はバフチン思想の広範な受容に役立ち、そのキーワード化にもつながった。と同時に、バフチン思想のはらむ多

様性や矛盾をいくぶんかそぎ落として得られた定式でもあった。対話性にしてもカーニヴァルにしても、そこには深い洞察や緻密な分析とともに、論じ尽くされていない要素がひそんでいることに、バフチンを読むすべての人が気づいてきただろう。それもまたバフチン解釈を刺激してきた。独特な分かりやすさと同時に、謎めいた逆説性をはらんでいる点にバフチンの長期にわたる人気の秘密があるとさえ言えるだろう（その点、ロシア・フォルマリズムに似ている）。本論の最後にこの問題一すなわち、彼の主要概念そのものにつきまってきた謎めいたイメージについて論じてみよう。ただし、彼のすべての主要概念を取り上げるのは不可能なので、ここではポリフォニー小説論を取り上げよう。対話やカーニヴァルと並んで、バフチン思想を代表する概念であり、キーワードでもある。

『ドストエフスキーの創作の諸問題』（1929）で打ち出されたポリフォニー小説論は、ドストエフスキーの長編小説では作者と主人公が対等の立場に立つという有名なテーゼを含む。これは多くの論者の反発と困惑を招いてきた。常識的に考えて、芸術作品の創造者たる作者と被造物たる主人公が対等でありうるはずがない。バフチンはたんに間違っているか、あるいは何か別のことを言いたかったにちがいないと多くの人が考えた。修正論を示した研究者は少なくない。たとえば、バフチンは「作者」でなく「語り手」と言うべきだったろうと。それならば理屈は通る。たしかにドストエフスキー作品の語り手はしばしば主人公に対して不明箇所を抱え、できごとの全側面を語り尽くすようには作られていない。20世紀文学でますます優勢になった「語り」の操作化（「信用できない語り手」など）をバフチンはいち早く説明することに成功したと<sup>46</sup>。

だが、バフチンはたしかに「作者」と言って

いる。彼が主題にしているのは作者と主人公の関係であり、作者と語り手、あるいは語り手と主人公の関係はその下位問題でしかない。バフチンにとって重要なのは、明らかに位階の異なる概念としての作者と主人公の関係である。この点でポリフォニー小説論は1960年代のナラトロジー（物語理論）とは射程が異なる（そしてより長い理論的生命力をもった）。彼は文学手法よりも創造原理そのものに関心を寄せていた。語り手と主人公が対等たりうるかが手法的な問題だとすれば、作者と主人公が対等たりうるかは哲学的な問題であった。

ポリフォニー小説論が反発を受けつつも、活発な議論を誘ってきたのは、その逆説性にもかかわらず、ドストエフスキー文学の、さらには20世紀文学の発展のある本質的要素を突いているように多くの読者が感じたからだろう。

ポリフォニー小説論をめぐる話題になることに以下のような事情もある。1920年代初頭の草稿「行為の哲学」と「美的活動における作者と主人公」において、ドストエフスキーについてポリフォニー小説論とは逆の評価、つまり否定的な評価を行っているように見える点である。しばしば「初期バフチン」と呼ばれるこれらの草稿で、彼はある哲学体系を構築しようとしていた。それは「我」と「他者」というカテゴリーの現象学的記述を通して、新しい道徳哲学や美学、宗教哲学、政治哲学（！）などの体系を作り出そうとする試みだったとされる。結局、道徳哲学に関する部分（「行為の哲学」と美学に関する部分（「美的活動における作者と主人公」）の草稿だけが残っている<sup>47</sup>。とくに後者は、芸術創造における作者と主人公の関係についてまとまった論考を残している。これがポリフォニー小説論とは別の方向を向いた議論ではないかと言われてきた。

バフチンによれば、作者と主人公の関係は「我

と他者」のモデルで解すべきである。たとえば、私は私の身体の全体を見ることはできない。自分の誕生と死に立ち会うこともできない。言いかえれば、私は自らの空間的全体も時間的全体も把握できない。意味的・価値的な全体についても同様であり、私は私の生の意味について最後の言葉を発することができない。我はつねに我に合致することがないからである。他者の権能について考えなければならないのはまさにここである。他者こそが私の未完結な全体性を完結させることができる。私の身体の全体を見るのは他者であり（したがって、鏡像とは本質的に「他者の目」である）、私の誕生と死を見取るのも他者であり、私の生の全体的な意味について何かを述べるのも他者である。芸術作品における作者と主人公の関係とは、このような意味での我と他者の関係の具象化であるというのが初期バフチンのテーゼにはほかならない。つまり、主人公を美的に完結することが作者の使命である。作者は主人公に対して外在的な立場を確保し、その権能を生かして、主人公の生を完結したフォルムに転じなければならない。芸術作品における主人公の生とは、現実の生とは質的に異なる、作者の外在性に対して受動的に完結させられた像である。「完結美学」とも呼ばれる考えである。

さて、こうした「完結美学」がポリフォニー小説論と矛盾なく合致するのだが、この問題は草稿「美的活動における作者と主人公」がバフチンの死後、弟子たちによって発表されて以後、すぐに気づかれた。というのも、「完結美学」のテーゼは明らかにポリフォニー小説論とは逆の議論をしているように読めるからだ。そして実際、この草稿でのドストエフスキーの位置づけは否定的とは言えないまでも、多分に周縁的である。そこで、「初期バフチン」と1920年代後半のバフチンのあいだには何らかの態度変更、

すなわち芸術作品の構成原理を完結でなく未完結性に求めようとする態度変更があったはずだという想定がなされた。カントのコペルニクスの転回に比して言えば、バフチンのドストエフスキー的転回とでも言えよう。

ところが、こうした「転回」を裏付けるような資料は見つかっていない。むしろ、バフチンにとってそれは転回ではなく連続だったのでないかと思わせるふしがある。いくつかの状況証拠があるが、1922年にはすでにドストエフスキーがバフチンの思索の主対象になっていたことを物語る、カガンあての手紙が残っている。さらに、同1922年にはバフチンがドストエフスキーについての本を出版するという予告が出されていたという。この本は結局出版されず、原稿も発見されないため、1929年のドストエフスキー論と内容的にどのような関係にあるのか、分かっていない。1922年にはバフチンの友人ペンピャンスキーが『ドストエフスキーと古典古代』という著書を出しており、このことから当時ドストエフスキーがバフチン・サークルの中心テーマの一つであったと推測できる。

脱線になるが、哲学者は（偉大な哲学者ほどしばしば）思想的脱皮のような現象がある。カント哲学が前批判期と批判哲学の時期に分けられることや、フッサール現象学が初期、中期、後期と変貌を遂げたことや、ヴィトゲンシュタインが前期と後期に分かれるといった、人口に膾炙した哲学者の物語がある。バフチンのばあいも初期の草稿と盛期の著作を読みくらべたときに感じるのは、それらと同種の脱皮（問題設定や用語法、文体などの）、すなわち転回にほかならない。ところが、それを跡づけるような資料も、本人の証言もないのである。

だがそれでも、何らかの態度変更、転回はあったように思われる。初期の草稿で彼が掲げていたのは、現象学的記述に基づく新しい道徳哲

学の構築であった。彼が考えていたのはおそらく、マックス・シェーラーの『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』（1913 - 16）と同種の試み、すなわちアプリオリでありつつも実質的な価値倫理学の構築だったろう。だが、1920年代半ば以降、バフチンはこうした試みには戻っていない。現実の生を現象学的に記述するのではなく、文学作品、それも長編小説がいかにかに生を記述しえたかという問題圏に移っている。ドストエフスキーのポリフォニー小説は未完結な生を描く長編小説のもっとも進んだ形態として捉えられたのだろう。言いかえれば、バフチンはオーソドックスな哲学者たらんとする夢を捨て、文学を議論の素材とする思想家の途を歩み始めたのだろう。この転換についてはいくつかの説明が試みられている。一つには、1920年代末にはもはやマルクス主義と異なる独自の哲学体系を構築することが不可能な状況であったこと（哲学者のシュペートは1930年、哲学的著作の執筆を禁じられ、翻訳活動に向かわざるを得なかった）。もう一つにはより積極的な理由が考えられる—レニングラード時代のバフチン・サークルにおいて言語論の理論的展開があったことだ。発話の社会交通的性質、社会的評価の担い手としてのイントネーションなどの概念系が切り開かれたことで、文学作品への新しいアプローチが可能になった。ポリフォニー小説論はその成果と見ることができる。佐々木寛は1929年のドストエフスキー論は「イデオロギー記号の社会学をふまえることによって初めて可能な著作だったのである」<sup>48</sup>と述べている。そして1930年代、バフチンの創作力がもっとも盛んだった時代、彼が切り拓いた領野は、ヨーロッパの長編小説（ラブレールやゲーテを代表として）がいかにかに歴史的に生成する社会的生を捉えていったかという長編小説の発展史だった。彼はこの時代、「リアリズム」という用語をよく

使うが、これはソ連の文芸政策への妥協ではないだろう。上記のような独自の意味で「リアリズム」と言っていたのである。そこから「グロテスク・リアリズム」というバフチン独自の用語法も生まれた。彼にとって長編小説のジャンルは（初期ロシア・フォルマリズムが説くような）文学手法の組合せではなかった。世界の捉え方そのもの、かつそれを具現するための「生けるジャンル」とも言うべきものだったろう。

### まとめとして

こうして見てくると、バフチンの思想史的位置づけにはある種の逆説がつきまとっているように感じられる。彼の同時代人で論敵でもあったロシア・フォルマリスタたちが新しさや切斷を追い求めたのに較べ、バフチンは伝統的、復古的な側面も強くもっていたように見える。これが彼の思想の謎めいた雰囲気に関与して役立っていった。

1920年代のバフチンは奇妙な時代の構図にはまり込んでいたのかもしれない。当時の彼は若く精力的で、友人たちとともに西欧の最新の哲学、言語学、心理学、芸術学などの吸収と咀嚼に余念がなかった。だが、そのことによって逆に彼らは時代から取り残されていった。なぜなら、彼らが検討していた諸潮流—新カント学派、現象学、ソシユール言語学、精神分析、さらにはフォルマリズムでさえ—のほとんどすべては、しだいにソ連の公式な知的社会に無縁なもの、有害なものとなっていったからである。そればかりか、それらは急速に忘れられていった。バフチンやヴォロシノフ、メドヴェージェフの著作で言及されている名前の多くは、1920年代まではよく知られていたが、30年代以降のソ連社会では忘れ去られた。だからこそ、1960年代にバフチンが再発見されたとき、彼の議論のコンテキストが理解されなかったのでは

る。むしろバフチンの著作を手がかりにして、研究者たちは 20 世紀前半のロシアの思想地図をふたたび描き始めた。

バフチン・サークル中、ほとんどただ一人バフチンだけが 1920 年代までに吸収した諸分野の知見を 30 年代の著述に生かすことができた。それはもちろん、彼の才能が友人たちとは比較にならないものであったことが大きいだろう。だが同時に、彼がクスタナイやサランスクといったソ連社会の周縁に追いやられ、中央での思想地図の地滑り的变化に巻き込まれなかったことも、プラスにはたらいただろう。長編小説が現実の生をその生成の相において描き出すという着想は、ロシア・フォルマリストが 1920 年代に考案したシステム論的枠組（国外に出たロマン・ヤコブソンによって構造主義にまで発展させられる）と較べてみたとき、むしろ伝統的、復古的な趣がある。だが 1960 年代に再発見されたとき、その伝統的、復古的な要素が世界の目には革新的なものに映った。世界的にシステム論・構造主義のブームは終わりつつあったからである。バフチンの著作は非（反）システム論的な記号論を約束するもののように受け取られた。その一方で、ソ連知識人にとってバフチンとは、忘れ去られていた 1920 年代のロシアの知的遺産を取り戻させる存在として現れた。バフチンが世界に対して果たした役割とロシアで果たした役割にはずれがあった。そのずれがバフチン受容の多様性とも不協和（議論のかみ合わなさ）ともなったのだろう。

今日ではどうか。いくどか述べたように、思想史的文脈の復元が進み、「謎めいた思想家」のイメージはバフチン解釈を刺激しなくなりつつある。以前ほど多様な読みが試みられているわけではなく、思想史的文脈のなかで読まれる傾向が強まっている。ただし、文脈の拡大は試みられており（ロシア宗教思想の文脈やドイツ哲

学の文脈など）、その方向でバフチン研究のアカデミズム化は進んでいる。「謎めいた思想家」のイメージは、かつてそれがバフチン受容に及ぼしていた生産性を失いつつあると結論づけられるだろう。だが、そのことは彼の思想に新しい問いかけをもって近づくことを無意味にするわけではない。

【後記】本稿は 2011 年度前期の文化科学研究科授業「文学理論 I」の講義資料と討論に基づく研究ノートである。積極的に討論に加わってくれた受講者諸君に感謝したい。

- 1 一例として、社会科学、とくに文化人類学の方法論におけるポリフォニーの意味を考察した興味深い論考として：三浦敦「ポリフォニー現象の言語分析と社会科学—デュクロのポリフォニー言語学をめぐって」『日本アジア研究』第 6 号（2009 年）、63—84。
- 2 一例として、以下を参照：Homi K. Bhabha, *The Location of Culture*, London and New York: Routledge, 1994; Eva Hausbacher, *Poetik der Migration: Transnationale Schreibweisen in der zeitgenössischen russischen Literatur*, Tübingen: Stauffenburg Verlag, 2009.
- 3 バフチン受容についての代表的研究としては：Caryl Emerson, *The First Hundred Years of Mikhail Bakhtin*, Princeton: Princeton UP, 1997.
- 4 M.バフチン『ドストエフスキイ論—創作方法の諸問題』新谷敬三郎訳、冬樹社、1968 年；ミハイール・バフチン『フランソワ・ラブレールの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳、せりか書房、1974 年；V.N.ヴォロシノフ、M.M.バフチン『マルクス主義と言語哲学』桑野隆訳、未来社、1974 年。
- 5 佐々木寛は、この三書の邦訳によって「文芸学者、対話的交流のイデーの提唱者バフチン」、中世・ルネッサンスの民衆文化の豊かさを開示した「人文学者バフチン」、そして「マルクス主義記号学の先駆者としてのバフチン」という三つのバフチン像が示されたと説明している：佐々木寛「バフチンと一九二〇年代前半のロシア」『ミハイールバフチン全著作第 1 巻〔行為の哲学に寄せて〕〔美的活動における作者と主人公〕他』伊東

- 一郎・佐々木寛訳，水声社，1998年，507。
- 6 Katerina Clark and Michael Holquist, *Mikhail Bakhtin*, Cambridge and London: The Belknap Press of Harvard UP, 1984; カテリーナ・クラーク，マイケル・ホルクイスト『ミハイル・バフチーンの世界』川端香男里，鈴木晶訳，せりか書房，1990年。
- 7 Gary Morson and Caryl Emerson, *Mikhail Bakhtin: Creation of a Prosaics*, Stanford: Stanford UP, 1990.
- 8 以下を参照：Craig Brandist, Galin Tihanov (eds.), *Materializing Bakhtin: The Bakhtin Circle and Social Theory*, Oxford: St. Anthony's College, 2000; Craig Brandist, David Shepherd, Galin Tihanov (eds.), *The Bakhtin Circle: In the Master's Absence*, Manchester and N.Y.: Manchester UP, 2004.
- 9 ソロヴィヨフについて日本語で読めるものとしては：御子柴道夫『ウラジーミル・ソロヴィヨフ—幻視者・詩人・哲学者』岩波書店，2011年。
- 10 ロシアの言語思想に関して近年影響力をもつ研究として：Thomas Seifrid, *The Word Made Self: Russian Writings on Language, 1860-1930*, Ithaca and London: Cornell UP, 2005.
- 11 貝澤哉「対話化されるアイデア—バフチンのドストエフスキ論とロシア・プラトニズムのコンテクスト」、『引き裂かれた祝祭—バフチン・ナボコフ・ロシア文化』論創社，2008年，124。
- 12 S.S.コンキン，L.S.コンキナ『ミハイル・バフチン：生と創作のページ』サランスク，1993（*C.C. Конкин, Л.С. Конкина. Михаил Бахтин: страницы жизни и творчества. Саранск, 1993*）。
- 13 90年代以降のロシアにおけるバフチン解釈の新しい潮流については以下を参照：貝澤哉「現代ロシアにおけるバフチン」『引き裂かれた祝祭—バフチン・ナボコフ・ロシア文化』49-66。
- 14 例としては：Ruth Coates, *Christianity in Bakhtin: God and the Exiled God*, Cambridge: Cambridge UP, 1998; Alexander Mihailvic, *Corporeal Words: Mikhail Bakhtin's Theology of Discourse*, Evanston: Northwestern UP, 1997.
- 15 この部分については主に以下を参照した：クラークとホルクイスト，前掲書；コンキンとコンキナ，前掲書；ミハイル・バフチン『ドゥヴァーキンとの対話』モスクワ，2003（*M.M. Бахтин. Беседы с В.Д. Дувакиным. М., 2002.*）
- 16 著作として以下のものがあるが，未見：Nicholas Bachtin, *Lectures and Essays*, University of Birmingham, 1963. また，英国の評論家テリー・イーグルトンはニコライ・バフチンとヴィトゲンシュタインの交流について評論や小説を書いている。イーグルトン『ヴィトゲンシュタインの友人たち』『批評の政治学：マルクス主義とポストモダン』大橋洋一訳，平凡社，1986年；イーグルトン『聖人と学者の国』鈴木聡訳，平凡社，1989年。
- 17 近年ではシュベートの研究が進み，彼がたんに「現象学の紹介者」でなく，1910-20年代のロシア・ソ連の思想界・文学界において大きな役割を果たした独自の哲学者であることが明らかになっている。以下を参照：野中進，書評 Galin Tihanov (ed.), *Gustav Shpet's Contribution to Philosophy and Cultural Theory*, West Lafayette: Purdue UP, 2009, 『ロシア語ロシア文学研究』43（2011），印刷中。
- 18 クラークとホルクイスト，前掲書，33。
- 19 同上。
- 20 バフチン『ドゥヴァーキンとの対話』19。
- 21 コンキンとコンキナ，前掲書，181。
- 22 バフチン『ドゥヴァーキンとの対話』20。
- 23 コンキンとコンキナ，前掲書，363-4。
- 24 同上，191。
- 25 この時期のバフチンとカガンについては：野中進「歴史と超越—カガンとバフチン」『ミハイル・バフチンの時空』せりか書房，1997，258-259。
- 26 バフチン『ドゥヴァーキンとの対話』238-9。
- 27 B.ブール「バフチンとカッシーラー」野中進訳，『思想』2002，8号，80。
- 28 ヴャチェスラフ・イワノフ「M.M.バフチンの記号，発話，対話に関する著作が現代記号論にとって有する意義」，ヴャチェスラフ・イワノフ『記号論・文化史選集』第6巻，モスクワ，2009年，217。
- 29 コンキンとコンキナ，前掲書，357。
- 30 Morson and Emerson, *Mikhail Bakhtin: Creation of a Prosaics*, 107.
- 31 ミハイル・バフチン著，桑野隆訳『マルクス主義と言語哲学』（改訳版），未来社，1989，7-8。
- 32 このテーマについては：Peter Ives, *Gramsci's Politics of Language: Engaging the Bakhtin Circle and the Frankfurt School*, Toronto: Toronto UP, 2004.
- 33 クラークとホルクイスト，前掲書，171。
- 34 このインタビューに解説を寄せたコージノフも，バフチンのこの種の発言（「私は熱狂的なカント主義者だった」など）を慎重に吟味する必要性を説いている。コージノフ「生きた対話のなかのバフチン」，ミハイル・バフチン『ドゥヴァーキンとの対話』313-7。
- 35 Vladimir Alpatov, "The Bakhtin Circle and

problems in linguistics”, in Craig Brandist, David Shepherd, Galin Tihanov (eds.), *The Bakhtin Circle: In the Master's Absence*, 84-5.

- <sup>36</sup> たとえば、アルパートフは『マルクス主義と言語哲学』を検討して、この書物で打ち出されている反ソシユールの（反システムの）な立場が当時のソ連とヨーロッパの言語学の潮流からすれば復古的なものであったと結論づけている。ただし、ガーディナーや時枝誠記との同時代性も指摘している。アルパートフ、前掲論文、94-5。
- <sup>37</sup> Emerson, *The First Hundred Years of Mikhail Bakhtin*, 50 - 51.
- <sup>38</sup> イワノフ「バフチンについての著作への後書き」、イワノフ『記号論・文化史選集』第6巻、219。
- <sup>39</sup> 『ドゥヴァーキンとの対話』、270-1。
- <sup>40</sup> ボリス・エゴーロフ「M.M.バフチンについて」、『バフチン論集 (Bakhtinskij sbornik)』1号 (1990)、6。ただし引用は：The Bakhtin Circle: In the Master's Absence, 2 から。
- <sup>41</sup> Ju.M.カガン「家族の書庫からの古い文書について (M.M.バフチンと M.I.カガン)』『対話, カーニヴァル, クロノトポス』1992, N1, 60-88。バフチンとカガンの交流については：野中進「歴史と超越-カガンとバフチン」も参照。
- <sup>42</sup> コンキンとコンキナ, 前掲書, 229。
- <sup>43</sup> 『ドゥヴァーキンとの対話』, 282。
- <sup>44</sup> Ju.M.カガン, 前掲論文, 80-81; 野中進「歴史と超越-カガンとバフチン」, 254。
- <sup>45</sup> 『ドゥヴァーキンとの対話』, 100-102。
- <sup>46</sup> ソ連時代の高名な文芸学者 B.コルマンがそうしたポリフォニー小説論の「修正解釈」をとっていたことは：コンキンとコンキナ, 前掲書, 297。
- <sup>47</sup> 邦訳では：『ミハイル・バフチン全著作第一巻 [行為の哲学に寄せて] [美的活動における作者と主人公] 他』伊東一郎・佐々木寛訳, 水声社, 1998年。
- <sup>48</sup> 佐々木寛「バフチンと一九二〇年代前半のロシア」, 526。